国際理解を深めて

積丹町の小中学生の場合

北海道の西端、日本海に突き出した積丹半島。その半島のほぼ突端に積丹町がある。面積238.17㎡、人口3369人（平成12年度末現在）漁業と観光の町である。北方圏センターでは2001年、2002年と２年間、積丹町教育委員会のバックアップや地元の協力のもと町内の小学校６校、中学校１校で「国際理解促進事業」を実施した。

札幌や帯広の市内や周辺にある小中学校では、JICA北海道国際センター（札幌および帯広）に滞在して研修するJICA研修員による学校訪問が年間何回か実施されている。小中学生にとって世界を知る貴重な機会になっているが、それぞれ研修がある研修員たちを各地へ引率できる回数はまだまだ少ない。積丹町での企画では、地元の熱意によって北海道海外技術研修員の参加を得て、2年続けて１泊しての小中学生や地元との交流が実現した。

2001年、最初の訪問

9月20日（木曜日）に、北方圏センターは、「積丹町立小・中学生との交流会」を初めて実施した。当時JICA北海道国際センター（札幌）に滞在して研修中であった北海道海外技術研修員（ネパール、中国、ブラジル、パラグアイ、チリなどからの13名）、サハリン技術研修生2名、自治体職員協力交流員1名など北海道が受け入れていた研修員総勢16名が朝8時バスで積丹町に向かった。

到着後、一行は数人づつに分かれて美国小学校（参加児童数29名）、幌武意小学校（全校児童8名参加）、日司小学校（全校児童4名参加）、入舸小学校（全校児童10名参加）、野塚小学校（全校児童12名参加）、余別小学校（全校児童17名参加）、美国中学校（22名参加）など、児童、生徒が待ち受ける各校を訪問、それぞれ児童、生徒が考え、準備した研修員の国の言葉での挨拶、自己紹介、日本の遊びやゲームなどに参加して交流した。

学校外では保護者や地域町民、学校、教育委員会関係者との余別地区交流会が開かれて、地元の伝統芸能も披露されるなど研修員たちも楽しい時間を過ごした。

本場の餃子づくりを披露する研修員（入舸小）

教室でこんにちは（余別小）

2002年、札幌で再会

その半年後の春休み（3月3日、日曜日）、「意見交換と料理交流会」と名付けられた一日、積丹町からは学校関係者5名、児童・生徒4名が札幌のJICA北海道国際センターを訪れた。この日は、別の機会に訪問していた日高管内静内町からも8名の子供たちがやってきて、研修員たちが腕をふるった自慢のお国料理を皆で味わった。すでに顔なじみの研修員たちとあっていちだんと親しみをました様子であった。

9月11日（水）－12（木）日には、同町立入舸小学校関係者との交流会や、町内小・中学校7校と同様の国際理解促進事業「海外研修員との交流会（積丹町）」を再度実施した。

この年も新年度に北海道が受け入れをしていた15名の海外技術研修員が参加した。2回目とあって前年より児童・生徒たちとの交流時間を多くとり、各校毎に、研修員といっしょに餃子など各国の料理を作ったり、地元の食材で生徒たちと研修員が調理をしたりと交流内容も深まった。また、スポーツ、歌の交換など身近になった外国からの研修員との交流を楽しんだ。

2003年、冬

積丹町、静内町の児童・生徒はさらに2回目の北海道国際センター訪問を果たした。2003年（平成15年）3月1日（土）には、積丹町から21名、静内町からは10名の児童・生徒が来札して北海道海外技術研修員が作ってくれたお国自慢の料理やお菓子など外国の味を体験した。全員で料理を味わった後は、研修員たちの国のゲームや遊びに興じて楽しい1日を過ごした。

それに先だって2月には、一部研修員が北方圏センターの引率で積丹町で開催の「国際交流　冬のつどい」や「町民親雪祭り」に参加した。雪が珍しい国の研修員たちは雪中運動会やミニスキーを体験し、秋に交流した児童と再会しともに雪遊びに興じた。

まずは握手から（余別小学校で）

地元の保育所を訪問